

親鸞思想と社会活動

—— 仏教福祉活動上の諸問題 ——

藤 憲 之

序

古くから日本において、仏教思想を基盤とした社会活動は様々な形で行われてきた。現代においても、それは変わることなく、活動の主体者が仏教思想を十分に意識しているかどうかは明確でない部分もあるが、政治、平和、環境等の幅広い分野の活動の中に、仏教思想を垣間見ることができる。とりわけ、今回取り上げることにした福祉分野については、近年、日本において社会福祉が重要な社会問題となる中で、仏教教団・仏教者も積極的参画しており、仏教思想を基盤とした社会活動が広く展開されていると印象付けるものとなっている。

このような活動が、葬式仏教とも指摘されることもある日本仏教の本来の姿や思想を示すことにも繋がっていること、また仏教と社会との関係を今一度検討する機会ともなっていることは、大変意味のあることだと思われる。ただ、その一

方で実際に行われている社会活動の在り方、内容を見ていくと、活動の全てが適切に展開されているとは言えないように感じる。

そこで今回は、仏教思想と社会活動について考察してみた。無論、仏教思想も社会活動も幅広いため、その全てを述べることはできない。そこで、今回は親鸞の思想を基にしている（とされる）福祉的な社会活動を中心に、そこにおける問題点等を考察していくことにした。

一

まず、簡単に日本における仏教に関わる福祉的活動の流れを見てみると、中世以前の仏教思想に基づく福祉的活動は、政治を司る立場にある仏教信仰者、あるいは一部の僧侶や仏教教団を中心に実践・展開されてきた。これらの活動は、当時の社会体制、伝達手段などの時代的な要因もあり、散発的なものが多く、活動地域、対象人数も限定的であり、日本全

体に広がり、社会全体に影響を及ぼすというものではなかったと言える。それが近代になり、仏教教団・仏教者による福祉的活動が、ある程度統制された形で全国的に展開されるようになってくる。その要因としては、伝達手段の発展とともに、欧米文化・思想を基にした資本主義社会の成立とキリスト教的福祉事業の全国的な広がり、さらにはそれらの思想に影響された仏教者・仏教教団の社会活動に対する意識の変化等が考えられる。もちろん当時の活動・事業は、今日における仏教的福祉活動の視点から見ると不十分なものではあるが、その時代の状況の中で展開された思想や姿勢は、現在の活動基盤の一つを形成していると言える。

現代の仏教教団・仏教者による福祉的活動は以上のような流れを踏まえつつも、現在の日本社会の状況を反映しながら広く展開されてきていると言つてよい。特に高齢者福祉の分野における積極的な活動の展開は、高齢社会日本の現状、それによって発生している問題点に対し、仏教教団・仏教者がしっかりとした意識をもって活動している結果であると言えるであろう。

このように日本に仏教が伝わってすぐから現代まで行われてきている福祉的活動ではあるが、その手法は様々である。それを見ていくと、実践思想や活動内容を形成していく際の過程は大きくは二つに分類することができる（これは他の社

会活動にも当てはまる）。

一つは福祉的活動を実践する明確な根拠がある程度存在する場合の過程である。これは福祉的活動を行う実践者が拠り所とする経典や仏教者（実践者が信じる仏教者、宗祖など）の思想や行動の中に、活動に関するものが示されており、それに則した形で活動思想や活動内容が形成していくものである。例えば布施行・利他行の実践、慈悲・福田思想の具現化などの為に、社会事業を行うことなどがそれに当たり、古くより政治を司る立場にある仏教信仰者、あるいは一部の僧侶や仏教教団を中心に実践・展開されてきた。

もう一つは、福祉的活動の明確な根拠となるものが分かりにくい場合の過程である。これは実践者が拠り所とする経典や仏教者の思想や行動に福祉的活動に関することが示されていない場合である。ここには、たとえ経典等に根拠が示されていても、時間的、空間的な限界の為、実際の活動には結びつけることができない場合なども含まれる。この場合、実践者は経典や仏教者の思想や行動を読み解き、それを基に社会活動の基盤や意味、活動内容を導き出していくことになる。

このような過程を辿っているものとしては、仏教思想に拠る平等、共生、あるいは人間観等の考え方を理念に掲げて活動している福祉施設事業などが挙げられる。当然のことではあるが、現代における社会の諸問題に対応して、その実践等を

検討する際には、こちらの過程を辿る場合がほとんどである。今回、主たるテーマとして取り上げる親鸞思想を基にした福祉的活動については、当然、後者の方に該当する。

二

親鸞の思想から福祉的活動を導き出すことは困難であると指摘されることがある。多くの場合その理由として、親鸞の著作が純宗教的なものであり、福祉的活動について何も述べてはいないということが挙げられる。また、親鸞は福祉的活動のみならず、社会活動、社会生活等についてもほとんど触れてはいないし、さらには、その生涯において福祉的活動を展開したということも確認できないということも指摘の中にはある。

確かに、親鸞の著作や生涯を見ていくと、その思想や行動が「生死出ずべき道」を中心に展開されていることは明らかであり、その中に社会活動の考え、行動をほとんど見ることではないと言つてよいだろう。改めて述べるまでもなく、親鸞の「生死出ずべき道」は、煩惱にまみれた存在である人間は、阿弥陀仏にすべてをまかせることによって救われる、という他力の救いを示しているものであり、現世において自らの力で善行を積み重ねること、あるいは他者に何らかの施しを行うことが救いに繋がるという思想ではない。その為、他

においては社会活動や福祉的活動の思想の基盤として位置付けられることのある様々な言葉についても（たとえば、その言葉を親鸞が經典から引用しているものであっても）、親鸞が使う場合、その意味が異なってくることもある。例を挙げると、「慈悲」について親鸞は

慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐるること、きはめてありがたし。浄土の慈悲といふは、念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生の利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば念仏まふすのみぞ、すゑとをりたる大慈悲心にてさふらうべきと云々。（『歎異抄』第四条 真宗聖教全書宗祖部七七五頁）

としており、福祉的活動の根拠として考えることは難しいものとなっている。

このような指摘に対し、親鸞の思想を掲げて福祉的活動を行う場合、親鸞は念仏者が福祉的活動を行うことをすべて否定している訳ではないということを前提として、親鸞の著作・生涯より、その思想全体を理解し、そこから活動理念、活動内容等を思考していくことで、その意味を説明していく。親鸞以降、真宗教団が成立、拡大して、信者の数が増えていく中で、福祉的活動を含めた社会活動が数多く行われてきてい

るが、ほとんどの場合、この展開方法が採られている。

ただし、ここで問題となってくるのが、そうした方法を用いて福祉的活動の意味、内容等を示していく中で、活動の根幹を成す親鸞の思想の解釈・引用に問題があると思われる場合も少なからず見受けられるということである。

親鸞思想の解釈・引用の問題についてはいくつもあるが、主なところを整理すると

- ① 親鸞の著作の一部、あるいは言葉のみを抜き出して、活動の根拠とする。
- ② 親鸞の思想の中心である宗教的部分が欠落している。
- ③ 現実社会（福祉）の状況に合わせる形で親鸞の思想を解釈する。

- ④ 一般的な福祉的活動や思想と親鸞の思想を重ね、その正当性を主張する。

となる。これらの多くは親鸞の思想の十分な検討をしないまま、福祉的活動に活用、展開していることで生じている問題であると言える。具体例としては、「御同行」「御同朋」という言葉のみを取り上げて、人間の仲間意識を強調し、強く社会連帯の重要性を説くことであるとか、福祉的活動は仏教者にとつては当然の使命であるといった主張をすることなどが挙げられる。

先にも述べたが、親鸞の著作などに福祉的活動の直接的根

拠となるものが見られない以上、本来なら親鸞の思想を理解することができていなければならないはずであるが、それが十分ではないのである。当然のことであるが、このことは親鸞の思想の本質を歪めることにもなりかねない。実際の活動において、親鸞の言葉はあるが、そこに親鸞の思想が見えないといった状況や、現代日本社会福祉の宗教の介入を避けている部分に合わせる為に、親鸞のもつ宗教思想が活動の中に反映されていないといった状況、また、福祉の思想や活動の範囲内に親鸞の思想を収めてしまうことで、独自性が発揮できていないといった状況等が発生してきている。

さらに、この他にも、実際に活動を行う者が親鸞の思想は理解していても、活動のフィールドとなる現代社会福祉に関して十分理解していないことで、実践上の困難が生じるといった問題なども存在している。この場合、福祉的活動の対象となる人（高齢者、障がい者など）が、親鸞の思想で精神的な安心感・安定感を得ることができていても、活用できるはずの福祉諸制度を利用することができないままだったり、権利が侵害されたままであるといった、社会生活上の不利益を蒙る事態が生じることがある。

以上、見てきたように親鸞の思想を掲げた福祉的活動は古くから行われているにも関わらず、現代においてもなお、多くの問題が存在していることは事実である。無論、福祉的活

動を行っていく中では、そのときどきの社会情勢によって福祉を取り巻く状況が変化することもあり、細かな点で様々な問題が生じてくるのは仕方の無いことではある。しかし、親鸞思想の理解といった活動の根幹に関わる部分での問題が未だに多く存在することは、決して良いことではない。

いずれにせよ、根幹部分に関わる大きな問題を抱えた活動が今後も継続されていくと、近い将来、親鸞の思想を基に福祉的活動を行っていく意味が、多方面から問われることになるであろう。

結

先に少し触れたが、親鸞の思想を掲げて福祉的活動を行う場合、親鸞は念仏者が福祉的活動を行うことをすべて否定している訳ではないということを前提にしている。それは親鸞が信仰に関わることで以外は、何をすべきかということを示していないからである。例えば、福祉的活動が救いとは直接関係がないということという親鸞の思想を認識した上でなお、一人の念仏者として、福祉的活動を行うのであれば、それは決して否定されるべきものではない。それどころか、親鸞思想の体现、救済、社会的展開、伝道、そして新たな福祉活動の創出等の観点からも意味のあるものだと考えることができる。

ただし、既に何度も述べたが、親鸞の思想から福祉的活動の直接的根拠を見出すことは困難なことである。それ故に、親鸞思想を掲げた福祉実践を広く展開していこうとする場合には、親鸞の思想と福祉的活動の双方についての慎重な検討を必要とし、活動をしていく中での継続的な確認も必要になってくる。特に活動の根幹となるべき親鸞の思想については、言葉の表面をなぞるだけでなく、しっかりと理解をもって福祉的活動へ展開していかなければならない。そうでなければ、親鸞思想を福祉的活動に展開する意味がない。

特に近年、社会の状況に合致することを優先し、福祉的視点に重点を置いて展開されている活動も目に付くが、親鸞思想を掲げて福祉的活動（他の社会活動も含まれる）を行う場合は、社会の状況に関わらず、その中心に常に「生死出ずべき道」を説いた親鸞の思想を置かねばならない。そうでなければ、時代に翻弄される活動にしかない。

今こそ、親鸞の思想を理解するという、基本的な姿勢に立ち、社会活動全般を検討していくことが必要なのではないかと考える。

〈キーワード〉 仏教福祉、親鸞思想、慈悲

（龍谷大学大学院修了）